

《企画書》

津田祐希（つだゆき）

【タイトル】角と牙がなくなった鬼の話一絆こそが幸せのカギ

【概要】

本企画は、人と人の絆がテーマの童話になります。

人間には様々な感情がありますが、多くのプラスとマイナスの感情を味わって人は大人になっていきます。

私の童話は鬼が人間になっていく様子をまずは外的要因の変化から書いているお話ですが、どんな状態でも人の温かさやぬくもりを受け取ることができれば、内面的にも必ず人生はよくなることをお伝えしたいです。

【想定する読者ターゲット】

小学生、大人からの読み聞かせも含める

【構成案】

- ・人間の子どもを食べることが大好きな鬼が村人達の子どもを隠す作戦から食事にありつけなくなる。
- ・鬼が人間が食べる食事を自分で調理してみるが、満足が行く食事をとるようにはならず、空腹で崖から落ちて気絶する。
- ・たまたま通りがかった心優しく善意の少女の美味しい食事を食べる機会に恵まれて人間それ自体を食べる以外にもおいしい食事、温かい食事、暖かい気づかいを体感でも経験する。
- ・鬼の象徴でもある角と牙が割れてしまうことで、鬼の外見が人間のように見えるようになる。
- ・動物は角があるものは牙がなく、牙のある動物は角がない。角と牙の両方がある事自体が完全を求める鬼のような幻想を象徴している。人間は不完全であるし、不完全でよい。
- ・人その存在自体のあたたかさに気づくと人生がよくなることを伝えたい。

以上になります。

原稿は 2934 字ですので、全文のせます。

どうぞよろしく願いいたします。

「角と牙がなくなった鬼の話」一絆こそが幸せのカギー 津田祐希

遠い森の奥に人間の姿をしている鬼が住んでいました。

その鬼は、鬼ですから頭には2本の角がついていました。

人間に化けることができるように両方の角をふさふさの髪の毛ですっぽりと隠していました。

口にはオオカミのような鋭い牙も2本生えていました。

獲物を一発で仕留めることができる自慢の牙でした。

鬼は食事の時以外は口を閉じて牙が見えないように、大切にしていました。

その方が人間らしく振舞えるような気がしたので、

鬼は普段から口を閉じる練習をしていました。

鬼にとっては角も牙もいざという時に自分を恐ろしく奮い立たせてくれる迫力のある身体の一部です。

木の実から絞った油を羊の皮にしみこませたもので角をピカピカに毎日磨いていました。

角は獲物がやってくるお告げを受け取る重要な触覚ですので

鬼は日々の角磨きを欠かしたことはありませんでした。

牙は食事を楽しむためのナイフのような役割ですから、

暇さえあればヤスリで良く研ぎ、切れ味はいつも抜群に整えてあります。

鬼は角と牙を最高の状態に保ちつつ、

大好物の人間の子供を探しに村にやってきました。

「へっ へっ へっ。わしは角と牙を両方もっている完璧な鬼だ！

さあて、子どもをさらって食べるとするか。」

鬼は毎日村にやってくる子どもをさらっていきます。

困り果てた村の人たちは家の床下に穴を掘って地下室をつくりました。

この人間のふりをする鬼が活動する昼間は

それぞれの家の地下室に子ども達の姿が見えないように隠しました。

その作戦がうまく行って、子ども達が村から姿を消すと

鬼は主食としている食べ物、つまり子どもに全くありつけなくなりました。

しかたなく、鬼は人間が食べているオートミール粥とにんじんスープを自分で料理して食べることになりました。

「ああ、腹いっぱい人間の子供が食べたい！！」

人里離れた山あいにお百姓のトーマと

9才の娘のアリョーシャという親子が暮らしていました。

子どもながらにお料理を作ることが得意なアリョーシャはトーマの自慢の娘でした。

2人は畑を耕し、木の実をとって、ヤギや羊、豚の世話をしていました。
朝早くから夜遅くまで共に一生懸命働きました。
トーマは1年に数回取れる野菜や家畜を売りに町の市場まで出かけていきました。

ある日のこと、トーマは風邪をひいて寝込んでしまいました。
トーマはアリョーシャを枕もとに呼んでこう言いました。
「可愛いアリョーシャ、明日は町の市場が開く日だ。
父さんの代わりに野菜と家畜を売ってきておくれ。」

次の日の朝早く、アリョーシャは馬に荷車をつないで沢山の野菜と家畜を
のせて町に向けて出発しました。
同じ日の朝、鬼も自分が食べるのに丁度いい子どもを探しに町の近くまで来ていました。
もう何日も子どもを食べていませんから、鬼はお腹がペコペコで気が狂いそうでした。
崖の上から人間の子どものいないかとあたりを見回すと、自慢の角がピクピク動きました。
そうです！待望の獲物を発見したのです。

鬼が四方八方、目を凝らすと遠くの方から子どものアリョーシャが荷馬車に
乗ってゆっくりと町に向かって進んでくるのが見えました。
「よっしゃ！朝ごはんだ！」

鬼は子どもを見つけたことが嬉しくてたまりません。
空腹で意識も朦朧としている鬼は、はやる気持ちを抑えきれずにうずうずしながら
アリョーシャが崖の下までやってくるのをいまかいまかと待ち構えていました。
鬼はあまりに腹ペコだったので足元がふらふらでした。
崖のふちまで一步一步進んでいくと、足がもつれて転んでしまいました。
そして鬼はそのまま、まっさかさまに崖から転落しました。

どっしーん！ ばーん！
ばきっ ばきっ
めりめりっ！

鬼は頭を強く打って自慢の角は全部根元から粉々に碎けて飛び散っていました。
口からは2か所血を流し、磨き上げた両方の牙も真っ二つに折れて跡形もなくなっていま
した。鬼は気を失って地面に倒れていました。

アリョーシャは、大きな音とともに空から大男が降ってきてびっくり仰天。
「たいへん、血だらけだわ」
アリョーシャはすぐに近くの川に水を汲みに行きました。

布を水にひたして丁寧に大男の顔についた血をふいてあげました。

「腹が減ってしにそうだー！」大男が寝言のように叫びます。

可愛そうに思ったアリオージャは、すぐに火をおこしはじめました。

荷車にある材料で豚の丸焼きと野菜をいため、食事の用意をはじめました。

アリオージャが一生懸命につくる絶品のお料理が出来上がる頃に、

気絶していた大男はそのいいにおいに誘われて目を覚ました。

「さあどうぞ、召し上がれ。」

大男は、がつつと皿のごちそうを一つ一つ平らげていきました。

「うちの庭でとれた木苺もデザートにいかが？」

大男は生まれてはじめて、真心のこもった食事を味わい目に涙をうかべていました。

「こんなうまい食事があるとは！」

食事を食べ終わるころには子どもをたべようとしていたなどすっかり忘れていました。

大男は言いました。

「お嬢さん、あたたかいご馳走をありがとう。わしは森の奥の城に住んでいる。

金貨や宝を褒美にあげたいのだが、どうかね？

そして、うちの料理人になってはもらえないだろうか？」

しばらく考えてアリオージャは

「いいわよ。」と返事をしました。

アリオージャは身体をあちこちをぶつけてまだ痛がっている大男が荷馬車に

乗るのを手伝い、トーマも迎えに行き3人で城にいきました。

城の広い台所につくとアリオージャは嬉々として腕によりをかけてご馳走を
沢山つくりました。

素敵なメニューが大きなテーブルにずらっと並びました。

メニュー

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1 セロリとイカのサラダすっぱ味 | 2 もこもこパン |
| 3 トウモロコシとキノコのスープごくごく | 4 マスの塩焼きヒマラヤの風そよそよ |
| 5 ガチョウの丸焼き魔女風味めらめら | 6 ローストポーク歯ごたえ十分 |
| 7 桃のコンポートみつばち付け | 8 アイスクリューム |
| 9 チョコレートケーキ | 10 ハーブティー |

近くにすむ大男の親戚一族もどやどや、香ばしいにおいに気づいて城を訪ねてきました。

見たことも聞いたこともないメニューを見て感嘆の声をあげています。

早速お料理を口にほおぼって舌鼓を打っています。

「こりゃー信じられないうまさだ！」

「毎日食べたい！神様みたいな料理人だ！」

その場にいた全員があたたかいおもてなし料理に感動して幸せをかみしめていました。

するとどうでしょう。

大男の親戚全員が隠していた頭の2本の角がぽろっと外れて、
左右の鋭い牙もすぽっと抜け落ちてしまいました。
こうなると、人間と全く見分けが付きません。

村では子どもを食べる鬼がいなくなって、
人々は大喜びで安心して暮らしはじめました。
子ども達はもう地下室に隠れる必要がなくなり、
落ち着いて生活できるようになり静かな幸せが訪れました。
アリョーシャは城の料理長になり、トーマは城の執事として働きました。
しばらくしてアリョーシャが大人になると大男はアリョーシャに恋をして
やがて二人は結婚しました。そして子どもにも恵まれて大家族になりました。
アリョーシャと大男はあたたかい食事をおして人との絆を育み
いつまでも幸せに暮らしました。